

全国直売所研究会リモートセミナー

～アフターコロナの直売所を考える～

第3回「6次産業化と農村、明日の希望と10年後の展望」

8月19日（木）15:00～16:15

1. これからの農村産業のカタチ

伊豆沼農産は1988年10月、「農業を食業に変える」を経営理念に掲げ創業した。「食業」とは、我々農業者が生産物を「食べ物」と捉え、供給者としての責任と誇りを持って、食卓までお届けする、という意味を表現した造語である。

2004年からは、「人と自然へのやさしさを求めて・・・」という旗を立て、農村の「場」で、「もの」と「ところ」を組み合わせ、物語性豊かな商品の提供を行っている。

現在は、養豚、水稲、ブルーベリー栽培のほか、食肉加工場、地域の農業生産者や商工事業者と連携した直売所、レストラン、食農体験教室といった多彩な自社施設の運営に加え、観光体験施設の管理業務も引き受けるなど、地域になくてはならない企業として位置づけられている。

宮城県登米市（NHK「おかえりモネ」の舞台）は、東日本大震災からの復興もいまだ途上だが、農林産物そして畜産が盛んな地域である。その中で徹底的に地域資源を活かし、農業を核としながらも業態にとらわれ過ぎず地域全体で産業を作っていくという取り組みは、今後の直売所の進むべきカタチそのものかもしれません。

セミナーでは、農村の中で理念を掲げ事業を推進する力の源を伺いたいと思います。

講師 （有）伊豆沼農産
代表取締役 伊藤 秀雄先生



2. 明日の直売所を元気に！加工品開発◎成功の秘訣

シュシュは2000年に農業交流拠点施設としてオープン。農産物直売所やレストランをはじめ、工房や食育体験施設などを備え、年間利用者数は49万人。大村産の農産物を中心にアイスやジュース、パン、菓子類などこれまで500以上の加工品を開発し、全国に販売している。また、地元産の食材をふんだんに使った料理を提供する「ぶどう畑のレストラン」は、一般客のほかに結婚式や法事でにぎわっている。

とはいえ、コロナ禍による観光や飲食施設の利用者減少は、周囲が農地に囲まれたシュシュでも少ないものではなかった。しかし、この災禍のなかでも従業員のアイデアを生かした加工品の開発は休むことなく行われている。

今年のヒット作は、パン工房でのフルーツサンドである。特に会員間の商品交流を生かした宮古島のマンゴーは人気がある。

セミナーでは、新型コロナ禍のピンチをチャンスに変え、さらには地域の農業者を元気にする、シュシュのホットな活動を紹介していただきます。

講師 （有）シュシュ
代表取締役 山口 成美先生

